

「死生学」プロジェクトの一〇年

一ノ瀬正樹

二〇〇一年のことである。当時の遠山文科大臣の推進した大学の構造改革計画、いわゆる「遠山プラン」の一環として、世界最高水準の研究教育拠点の形成を目指した「トップ三〇」制度が提唱され、それがやがて、競争的資金を募る形での「二一世紀COE」の公募となっていた。私の所属する人文社会系研究科でも、機会を逸することなく応募しようということになった。当時の似田貝香門教授が取りまとめ役となり、小佐野重利教授、竹内整一教授、熊野純彦助教教授らとともに私も応募案作成に加わることになった。その頃は「文学部無用論」といった議論が飛び交っていたときでもあり、私は、このCOEのプロジェクト提出の機会にこそ、やや大げさに言えば、将来の文学部存亡がかかっているというように、なぜか感じたのである。それゆえ、できれば、将来的にまさかの時では文学部・人文社会系研究科全体が丸ごとそちらへ移動できるような、そういうコンセプトの企画がよいのではないかと考えた。そこで私は、いろいろと思案の末、「死生学」というコンセプトを提案したのである。似田貝教授らはそれに賛同してくださり、正式に応募することになり、幸いなこ

とに採択に至った。二〇〇二年に「二一世紀COE」が始まり、その後「グローバルCOE」にも引き継がれ、結果的に一〇年間のプロジェクトとなった。本年二〇一二年三月にいよいよ終了を迎える。

本「死生学」プロジェクトは、文学部・人文社会科学研究科の皆さんを核として、関連領域の先生方を他部局からも招いて、一大プロジェクトとして運営してきた。当初の八年間は島蘭進教授を拠点リーダーとして戴いて、死生観、葬送文化、医療従事者のリカレント教育、などの研究・教育活動に主たる力点をおいて、大きな成果を収めてきた。手前味噌的な言い方になるかもしれないが、中間評価などでは、人文系のCOEプログラムとしては相当に高い評価をいただくことができた。これもすべて、死生学プロジェクトに関わってこられた先生方、研究員の皆さんのおかげです。最後の二年間、言い出しっぺとして、島蘭教授より拠点リーダーを引き継いだ立場から申し上げられるのは、ただただ感謝の想いだけである。本当にありがとうございました。

一〇年間の「死生学」プロジェクトの成果は、すでにいろいろな媒体を通じて発表してきたし、これからも整理された形で提示して総括を果たしていきたいと計画している。したがってここでは、当初より、何の因果か、死生学プログラムに深く関わってきてしまった一構成員としての感慨だけを、いくらか自由な仕方ですべて、とりあえずの、最後のご挨拶としたい。私自身は、「死生学」などというコンセプトを打ち出したものの、実は、その内実について確固たる表象を持つてはいなかった。ただ、死や生について人文的なアプローチを中心にして考えていく、その中には応用倫理的な主題も含める、という程度の大まかなイメージしかなかったのである。けれども、「死生学」以前に、「死生観」というかなり流通した概念があり、当然ながら、「死生学」は「死生観」と深く切り結び形で人々に理解される。そして、「死生観」は、日本人の共通理解として、死にいくとき、死に向かうときに、どのような心持ち・心構えでもってそれに臨むか、というときの態度や覚悟のようなものを指している。「死生観」の問題は、古くは武士道、戦争の前線に向かう兵士、そしていまは終末

期医療、脳死などに関わる文脈で顕在化する。あるいは、事故が避けられない事態に緊急的に陥ってしまった人、高線量の放射線を被曝せざるをえない状況に立ち入った人、などの場合にも「死生観」が主題化してくるはずである。だとすると、「死生観」と結びつけて論じられる「死生学」は、おのずと「死」に焦点を合わせることへと向く傾向を持つ。「デス・エデュケーション」、「看取り」、「死にゆく人へのケア」、「遺族のグリーフ・ケア」といった問題圏が主題の核を形成していくことになるわけである。実際、私たちの「死生学」プロジェクトも、清水哲郎教授の所属する「上廣死生学講座」をベースとして、こうした問題圏を主題化し、国内外に渡って活発な活動を繰り広げてきた。疑いなく、もし「死生学」プロジェクトがなかったならば、という反事実的仮定をして推定してみるならば、驚くべき程の有意義な成果をこの分野で収めたと確信できる。こうした核心部分に関する私自身の貢献は実はあまり多くないのだが、こうした「死生学」プロジェクトの活動部分は、客観的に言って、その意義を大変ポジティブに評価できることは間違いない。

しかし同時に、私たちのプロジェクト「死生学」は、英語で“Death and Life Studies”と表現されていることから分かるように、「死」だけでなく「生」にも同等に視線を向けることで、そのオリジナリティを打ち出すようにする企画である。「死生学」プロジェクトの中の私の役割は、事実上、こうした「死生学」概念の広がりや、いわゆる「死生観」についての研究からはいささか距離を置いた、外側の視点から、輪郭づけていくことであつたと今更ながら思い当たる。いわば、領域を広げようとする前衛部隊の役を、意識せざる形で担ってしまつていたように感じるのである。

医療的意思決定、生命科学との協働、触法精神障害者の刑事責任、戦争と戦没者の慰霊、ヒトと動物の関係、死刑存廃論、低線量被曝問題、これらが私が「死生学」プロジェクトの中で担当した研究集会のトピックである。こうした企画を提起するとき私は、結果的に、「死」や「死生観」の問題とゆるく結びあいながらも、歴

史的背景、そして現状の社会制度や学問状況のなかで、私たちはどのように「生」を紡いでいくべきなのか、というところに主題を寄せることになっていた。たしかに、「死生学」の看板を掲げるプロジェクトは国内外に少なからず存在するが、それらはほとんど例外なく「死」や「死生観」にのみ焦点を当てている。私は、しかし、「Death and Life Studies」という看板におそらく遠隔的に誘導されつつ、何となく、「死生観」の研究だけでは尽くせないと感覚していたのである。「ヒトと動物の関係」といった主題が、その私の感覚を典型的に表象している。ここでは動物実験や肉食という「死」に関わらざるをえない問題も論じられるが、同時に、「アニマル・セラピー」とか「介助犬」といった、人間と動物とが共生するありさまを論じる視点も主題の核心部を構成している。こういう視点を導入することが、私には、「Death and Life Studies」を一つの学問的プロジェクトとして遂行していくに当たって絶対不可欠であると感じられたのである。

こうした私の潜在的感覺は、もう一つの、こちらは顕在的な、想いに牽引されていたように、いまになって遡及的な仕方で自己分析できる。すなわち、私は、「死生学」プロジェクトの出立当初から、「死生学」を新たな独立のディシプリンとして確立できないだろうか、という目標を明確に心に抱いていたのである。正直に言って、現状での「死生学」は、多様な学問領域を、単に「死生」という概念のもとに、大まかに束ねる段階でしかない。「哲学」とか「心理学」といった意味での、学問の領域としての「死生学」がどこかに存在するには至っていない。けれども、どんな学問領域とて、太古の昔から自然物として存在したわけではない。どこかの時点で、何らかの状況性のもとで、一つのディシプリンとして自立してきたのである。だとしたら、「死生学」だって、将来的に、一つの学問領域として自立しうるのではないか。たとえば、「美学」がバウムガルトンの記念碑的著作によって自立していったように、何らかのきっかけがあれば、「死生学」とて、単なる多種学問の束ねではなく、立派な一つの科目として成り立ちうるのではないか。では、そうなるために、私たち

はどうすればよいのか。こう問うていったとき、私には、潜在意識的なレベルで、まずさしあたつて考察領域を限定することなく、大胆に、そしてチャレンジ的な方で、拡大していつて、可能性を探るといふ、いつてみれば試行錯誤的な動きが必要なのではないかと感じられたのである（そうだったのだといまになって思い当たる）。そうすること、**「死生学」**という活動の固有性が、独特のアプローチや方法論が、徐々に形を成してくるのではないか。最初から主題を限定して、現状の諸学問の束ねという段階に安住しては活路は生まれないと、そう感じたのである。こうした潜在的な感覚に誘導されながら、私の**「死生学」**プロジェクトにおけるアウトサイダー的な活動が行われていつたのである。

しかし、いづれにせよ、一〇年間活動したとはいえ、道は全くもつて半ばである。今後も、**「死生学」**確立への模索は続けられなければならない。バトンには、さしあたり**「死生学・応用倫理センター」**に引き継がれる。私自身もセンターの運営に引き続き関与していく。これはおそらく、世代間をまたぐリレーのようなものである。何十年かして、**「死生学研究室」**なるものが、たとえば**「哲学研究室」**の隣に存在するような時代が来るかもしれない。いや、せつかく**「死生学」**プロジェクトを遂行してきた立場からすれば、そうなつていただきたい。そして私は、そうなることが、人文系の学問をさらに社会と結びあわせ、大学からあるべき発信活動を促進していくことになるかと確信しているのである。